

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 講演 ロシア史上のモンゴル

著者	倉持 俊一
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	50
ページ	15-33
発行年	1998-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10565">http://hdl.handle.net/10114/10565</a>

## ロシア史上のモンゴル

倉持俊一

これからつたない話をさせていただきます。「ロシア史上のモンゴル」という題であります。それで皆さん必ずしも、ロシアの歴史についてよくご存知の方ばかりではないと思いますので、お配りしました、レジュメの最初のところに、ロシアの歴史がおおざっぱに分かるような表を作っておきました。

ご覧いただくと思いますが、九世紀から一二世紀頃まで、キエフを中心としたルーシと呼ばれる国があった。これがロシアの一番古い時代でございます。それから二番目に一二三七年から一四八〇年を「タタールの<sup>タタール</sup>軛」の時代、という風に書いておきました。ロシア語で「タタールスコエ・イーゴ」といいますが、高等学校の世界史の教科書などでキプチャク・ハン国と呼ばれている、あの時代です。つまりロシアがモンゴルの支配を受けていた時代でございます。その後が、モスクワ・ロシアの時代、これは一四五〇年ごろから一七一三年まで、英語で申しますとマスカヴィ *Muscovy* 高等学校の世界史で言いますとモスクワ大公国といわれる時代でございます。四番目がロシア帝国の時代で、一七一三年に有名なピョートル大帝が都をモスクワからサンクト・ペテルブルクに移しまして、それ以後の時代です。それから一九一七年の革命によって、ソヴィエト連邦の時代という事になるわけで、まあ、おおざっぱにロシアの歴史はこんな風に区分する事ができようかと思えます。

で、私は二二年間法政大学にお世話になりました、いろいろつまらない論文、つまらない本を書いてまいりましたが、

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、それはすべて一九世紀からロシア革命にかけてのテーマを扱ったものです。で、私はまあ専門といえばロシア、ロシアの中でも一九一七年の革命までという事になります。従いまして、本日のテーマ「ロシア史上のモンゴル」、これは今説明いたしました「タタールのくびき」の時代について考えてみるわけですが、これはまったく私の専門外の問題であります。ですから、ある卒業生はこのテーマを見て、「テーマがぜんぜん倉持らしくない。いったい何なんだ」という風に怒りましたが、その通りなのであります。まあ、日本史で言えば明治、大正時代の勉強をしているものが、遠く鎌倉時代、北条時宗とか高時の時代の事を論ずるわけですから、これはまったく専門外でありまして、したがって、あらかじめ弁解しておきますと、きちんとした学問的手続きをふんだ話という訳ではございません。はっきりした学問的結論があるわけでもありません。ただ「こういう問題がロシアの歴史にはあるんだ」という事をご紹介するというだけのことでございます。

で、後になって考えてみますと、最終講義という事で、二二年間の総決算をなすべき場でございますから、どうも、こういうテーマを選んだのは誤りだったなと気がついたんですが、気がついたのが四日くらい前で（笑）、今更どうにもならないという事で、わざわざ聞きに来てくださった方々には甚だ申し訳ないんですが、以上のような事でお許し願いたいと思っています。

それで、第一章「なぜ、モンゴルを」から始めたいと思います。まず、一般的に言えばご承知の通り、現在日本ではモンゴル・ブームといってもおかしくないような状態が続いております。レジュメにも書きましたが、これは私の考えで、「いや、それは違うよ」という方もいらっしゃるかもしれませんが、司馬遼太郎とか陳舜臣とかいった文学者の方々の働きに負うところが多いんだろーと思えます。司馬遼太郎さんは先年亡くなられましたけれど、ご承知の通り、大阪外国語大学の蒙古学学科のご卒業で、若いときから蒙古について、モンゴルについて非常に愛着と関心をお持ちでいらしゃった。今いろいろな本を読んで、後でまたご紹介しますが、モンゴルに対する並々ならぬ愛情を示しておられたといつてよろしいかと思えます。

で、陳舜臣さん、これも多くの方、ご存知だろうと思いますが、今年（一九九七年）の五月くらいまで二年以上にわたって朝日新聞に「チンギス・ハーンの一族」という小説を連載されて、私は実は読んでおりませんが、大変よく読まれて、評判も高かったようでございます。そのせいでしょいか、私は大変驚いたんですけれども、今年の九月二五日の朝日新聞なんですが、今年の国家公務員試験に受かった五二〇人のキャリアに、理想の上司を選んで書いてみるって書かせたところがですね、チンギス・ハーンがダントツの一位なんですね。五二〇人の内七九人で、二番があのおリックスの監督仰木彬、三番が、テレビドラマなどで課長など中間管理職を演ずる長塚京三で、四位が長嶋茂雄、五位が野村克也という、ちょっとこれでいいのかという（笑）結果です。ともかく、一位がダントツでチンギス・ハーンなんですね。これには私驚きました、そういうふうにはブームなんです。しかし、それだからこのテーマで話すというのじゃなくて、もっと直接的なきっかけがございます。それは何かというと、次のような事情でございます。

杉山正明という方のご本が四冊、レジュメに書いてございます。

杉山正明 『クビライの挑戦』

（朝日新聞社、一九九五年）

” 『モンゴル帝国の興亡』（上）

（講談社、一九九六年）

” 『大モンゴルの時代』

（中央公論社、一九九七年）

” 『遊牧民から見た世界史』

（日本経済新聞社、一九九七年）

以下、これについて考えていくわけですが、その最初です、ね、『クビライの挑戦』という本の紹介が、『史学雑誌』という史学会の雑誌がございますが、その一九九五年の一〇月号、つまり、ちょうど二年くらい前になりますけれども、これに書評が出ていました。私はそれまであまりモンゴルについてどうこうって考えたことはなかったんですけど、その書評の中に次のような一節がありました。ちょっと読みますけど「これまで『常識』や『定説』とされてきた、『文明の破壊者』たる『蛮族』としてのモンゴルへの評価を改めるために、個々の事例が具体的に挙げられる」で、それが一つですね。つまり、モンゴルは野蛮であったというのが今までの常識かつ定説であるけれど、それが間違いであることを主張する。それからもう一つはですね、もう一つじゃありませんけど、他にもあるんですが、私が注目したのは、「ロシアは

『モンゴルの支配を受ける事によって、世界帝国モンゴルの経済・文化・流通の体系のなかに組み込まれ』て活性化したのであり、ロシアでの『タタールのくびき』とは、『権力者の（つまりロシアの皇帝の事を言っているわけですが）正当化と民族意識の昂揚のための手段』に過ぎなかった」という点であります。そういうことを杉山さんが書いているという紹介なんです。

それでですね、まあ、前の点、モンゴルが野蛮であるときめつけるのはおかしいという点とはともかくとして、私はある意味で賛成ですが、「タタールのくびき」ですね、これが、その、そんなものはくびきでも何でもなかったんだ、それはモンゴルを追放した後の歴代のロシアの皇帝が、あの凶悪なモンゴルを追放したのは俺のおかげだということで、自分の権威を高めるために「権力者の正当化と民族意識の昂揚のための手段」としてそういうことが、つまりタタールのくびきが言われたわけだという点は問題だろうと思ったわけです。私、これを見て、ちょっと思いきったことを言われる方がいるんだなと思ひまして、まあ、暇ができたらぜひ読んでみようと思っておりました。で、今年の夏すこし時間があつたんで、そこに書いてございます杉山正明さんの（杉山正明さんは京都大学文学部の教授です）『クビライの挑戦』と『モンゴル帝国の興亡』というのを、ちょっと読んでみました。

ところで、この先にすすむまえに、「タタールのくびき」がロシアの歴史にどのような影響を与えたかについて、従来のように書かれてきたかということに、ふれておきたいと思います。ここでは、わざと、古典的通説、まあ、いわば少々カビの生えた通説を引用しておきます。ランボー A. Rambaud というフランスの歴史家が一八七八年刊行した『原初から現代までのロシア史』からです。西欧の歴史家の書いた通史として有名なもので、その後も版を重ねていて、まあ、ロシア史をやっているものは誰でも知っている本です。ランボーはですね、タタールのくびきについて「このころまでのロシアの運命は西欧のそれとよく似た形のものであった。しかし一三世紀にロシアは未曾有の不幸に見舞われた。ロシアはアジアの遊牧民族に侵略され、その支配下に入った。……タタール人は権力と勇敢のみを尊重する」。そういうタタール人に二五〇年支配されたために、「モンゴルのロシア支配は、まず、その間ロシアを西欧から完全に隔離させ、そして、政治的にアジアに結びつく状態をつくりあげた」というように言っております。これが従来の通説的な見方なん

ですね。

さて、それに対して杉山さんは、さっきちょっと、申しましたように、「そうじゃないよ。そうではない」という事を言われ、むしろさっきもご紹介しましたように、「モンゴルの支配を受ける事によって、世界帝国モンゴルの経済・文化・流通の体系の中に組みこまれて、活性化した」、つまり、モンゴルの支配下に入ったのは非常にありがたい話、ロシアにとってありがたい話だった、ということになっているわけです。

以下、まず杉山さんの文章を、簡単にご紹介してみます。それで最初ですね、「モンゴルが野蛮である」という、そういう、従来の通説は間違いだという点で、それについて、まあ、例えば杉山さんの最初の本(『クビライの挑戦』)の中ではこういう風に言われていますね。「モンゴルとその支配について、ありとあらゆることばをつくして、さまざまな非難や悪罵が歴史をつうじて浴びせられてきた。暴力、破壊、殺戮、圧政、搾取、強奪、強制、無知、蒙昧、粗野、野蛮、粗暴、悪辣、奸佞、邪悪、破廉恥、無軌道、不寛容、非文明などである。なかには明らかに意図した中傷の場合もある。

モンゴルについては、悪い評価がふつうであった。とりわけ、モンゴルを『文明の破壊者』とする考えは、古くからくりかえされてきた」。このことは、特にイランおよびイスラム圏で広く言われてきた、という部分はちょっと割愛しますが、「ロシア方面についても、『タタルのくびき』という用語で、モンゴルの支配がロシアにとっていかに過酷で苦渋にみちたものであったか、帝政ロシア時代から、ソ連時代、さらに最近にいたるまで、好んで語られた。とくに、ソ連時代のロシアでは『タタルのくびき』の話は、小学校の教科書でも、取りあげられた。世代をこえ、忘れることのできない『民族』の記憶として受けつがれ、宣伝されつづけてきた」というように書かれたうえで、モンゴルが野蛮で凶悪であったというようなことはでっち上げであったという事実を、いろいろと示されるわけです。ところで後の話と関連しますけど、杉山さん自身が、こういうことも書かれているんですね。モンゴルが南宋を滅ぼして杭州に入ってから「なにが変わって、なにが変わらなかったのか。確かなことはほとんどわかっていない。……ところが、たしかな根拠がないのに、モンゴルの打撃だけは声高に語られつづけた。『見込み』や『おもしろい』などである」という部分です。これは確かにおっしゃることはよく分かるんですけど。まあ、あらかじめ私の考えの結論じみたことを言ってしまうと、反対の議論も

そうなんです。タタールのくびきが何でもなかったということも、我々は歴史学の実証といいますが、実証にくい問題ではないのか、見込みや思い込みが入りやすい面も多いんじゃないかと思ひます。

それで、その問題はもう、今日は時間がありませんので、これ以上ふれずに、そこに題としてあげてある「ロシアの不幸は本当か」に移りたいと思ひます。これは実は、杉山さんの最初の本『クビライの挑戦』の第四章の題なんです。ここで、モンゴルの侵入を受けたとき「ロシア全土はほとんど廃墟となったと、いわれている。そして、その後、ロシアはモンゴルの支配のもとで長い苦しみの時代がつづいたとされる。ロシアの不幸の大半は、モンゴルによるものだというのが定説となっている。それを象徴することばが、『タタールのくびき』である」と書かれています。これもですね、まあ我々ロシア史の勉強しているものから見るとちょっと問題で、「ロシアの不幸の大半は、モンゴルによるものだ」というのが定説ということはないと思ひます。で、むしろ、これから、次の章でご紹介しますけれども、モンゴル支配の影響については、研究者の見解は一致しておらず、プラス面で評価する意見も多いわけです。

で、それはそれとして、杉山さんは、その「ロシアの不幸は本当か」という章の中で「では、その『タタールのくびき』は本当だったのだろうか」という風に、議論を進められるわけです。その結論だけ、先に言ってしまうと、『タタールのくびき』は、ロシアにあつては、長い歴史を通じて権力者の正当化と民族意識の昂揚のための手段であつた、さっきの書評にあつた言葉ですね。それで、これがこの章の結びの文章になっているわけですが、つまり、タタールのくびきつてのは、これはもう、ロシアの歴代の権力者の宣伝の手段であつた。くびきなどではなかつた、ということを書かれているわけです。

ところで、先にすすむまえに、一寸ふれておきたいことがあります。レグニツァ（高校の世界史ではリーグニッツもしくはワールシュタット）の戦いのことです。一二四一年、つまりモンゴルがロシアに侵入しまして、ロシアを通り越して東ヨーロッパに侵攻しますが、「一二四一年四月一七日、ポーランドに侵攻していたチャガタイ家のバイダルひきいるモンゴルの別働隊は、レグニツァ郊外の平原にて、シレジア公ヘンリクを主将とするポーランド軍とドイツ騎士団の連合軍を撃破したとされている。ただし、レグニツァの戦いなどはなかつたとする考えもある。レグニツァの戦いについては、

同時代の資料からは、よくわからない。ただし、あったとしても、おそらく、ごくさやかな種類のものではあった」と書かれています。

これは、そこに挙げてあります二冊目の『モンゴル帝国の興亡』の中ではですね、さらはつきりと、「一二四一年四月九日……レグニツァの東南の平原で、シュレジア公ヘンリク二世率いるポーランド軍とドイツ騎士団の連合軍を撃破した、と言われる。この平原には、のちにワールシュタットという町ができたので、この会戦を『レグニツァの戦い』とも、『ワールシュタットの戦い』とも言う。ワールシュタットとは、ドイツ語で『死体の町』を意味する。会戦後、死体がよく出てきたからだという。ただし、世界史上よく知られたこの会戦も、実は本当にあったかどうか、定かでない。同時代文献にはまったく見えず、一五世紀の文献で突然に大きく語られるからである。少なくとも、ポーランド諸公も、また当時はせいぜい二〇〇から三〇〇程度の動員力しかなかったと言われるドイツ騎士団も、この『会戦』を境に、大きくその顔触れが変わるなどということはない。客観情勢は、この『会戦』がたとえあったとしても、ささやかなものであったことを示している」と述べられています。

そして、それは更に三冊目の『大モンゴルの時代』の中では次のように言われています。「西征からんで、ポーランドにおける『レグニツァの戦い』は、世界史上の大事件とされるが、じつはあったかどうかさえたしかでなく、たとえあったとしても、ドイツ騎士団のほうはせいぜい二〇〇〜三〇〇人ていどの規模の『小戦闘』にすぎなかった。それをヨーロッパにかかわることとなると、途端に大袈裟にしたがるのは、ほほえましいというか、どこか滑稽にちかい。歴史教科書などで、必須の記憶事項として特筆大書するのはやめたほうがいい」と、まあ、こういう風に我々西洋史の教員にもご忠告してくれているわけです。その一、これについて私はよく分からないんで、幸い本学には、日本における数少ないポーランド近代史の専門家が非常勤講師になっていらっしゃるわけで、その方に、「こういう事が書かれているんだけど、どうだろうね」と聞きましたら、「それはとんでもない話よ」ということでした。どうも私もこれを読んだ時に、ちょっとこれ、ひっかかりましたが、やはり専門家に言わせるとそういうことだそうです。

で、ここまでをまとめておきますが、杉山さんがロシアとか、モンゴル軍の遠征について書かれていることには、



ちょっと、問題があるんじゃないかと思えます。ただしここではつきり申しておきますが、杉山さんの全体の論旨というのはですね、従来のモンゴルの評価をひっくり返す、これはさっきも言った通り、私も賛成なんです。それにもう一つですね、今までの世界史というのはあまりにも西洋、西ヨーロッパ中心の見方に偏っていた。だからそれを訂正することが非常に重要で、その一環としてモンゴルの問題が出てくる、というのが杉山さんの一番大きな主張だろうと思うわけです。で、僕はその点に関して、まったく賛成でして、私のことを申し上げるのは恐縮ですけども、法政大学における今年度の史学概論の授業は一年間を通じてですね、従来の世界史がいかにに西ヨーロッパ中心に偏っていたか、これを打破しなくちゃいけない、とずっとしゃべり続けているわけで、この点に関しては杉山さんのご主張、全面的に私も賛成なわけです。「タタールのくびき」とかレグニツァの戦いの問題が、杉山さんの論旨全体のなかでは、枝葉末節にあたるものであることも十分に承知しておるつもりです。そのうえで申しておることです。

えー、時間もございませぬ。すぐ第二章の「タタールの軛の影響をめぐる諸見解」に移りたいと思います。

それで実際にこの「タタールのくびき」がロシアの歴史にどういう影響を与えたと考えられてきたかということについて、まあ、私なりに調べてみたわけです。ただし、さっきも言いました通り、私の専門分野じゃないので、まことに恥ずかしい初步的な紹介でして、その、これお聞きただいて、もうちょっとこういう本があるよとか、このテーマでこれを読まないと話にならないよ、というご指摘も大いにあるんだろうと思いますがお許し下さい。まずそこに書いてあるカレツキー V. I. Koretskii という人の *Mongol Yoke in Russia* というのは、まあ、「タタールのくびき」を英語で表わすところ、いうことになるんですが、それをちょっとご紹介します。それはどんな本に載っている文章かといいますと、ここに書きましたように、J. L. Wiczynski (ed.), *The Modern Encyclopedia of Russia and Soviet History*, vol. 23, 1981. 「ロシア・ソ連史の大百科事典」まあ、そんな訳になるでしょう。これは、五〇冊をこす膨大な事典で、その二三巻に載っております。それで、彼は何て言っているかというと、レジュメに書いてあることを読むだけにしておきますが、「タタールのくびき」の厳しい影響は、一四八〇年以後も長期間にわたって認められる。くびきこそロシアが西欧各国に

比べて後進国になってしまった主要な原因の一つである」で、このカレツキーという人はソ連の学者ですから、さっき、杉山さんも書かれていたとおりで、ロシアが後進国になったのはタタールのくびきのおかげだということでもあります。そして、ブルジョワ史学、ブルジョワ史学ってご存知でしょうけども、ソ連時代のソ連の学者がですね、帝政時代のロシアや西側諸国の学者を言う場合にはブルジョワ史学というわけですが、「ブルジョワ史学はくびきの意義について様々の評価をしてきた。N. M. カラムジン、N. I. コストマーロフ等はモンゴルの支配を、ロシアの中央集権国家の形成に決定的な役割を果たし、ロシアの専制を強化したと主張し、それに対して、S. M. ソロヴィヨフ、V. O. クリュチェフスキーは、ロシア国家の成立を『内部的、有機的發展』の結果であるとして、くびきのロシア史への影響を否定した。またM. フロリンスキーやG. ベルナツキーは（これはいづれもアメリカの学者ですが）くびきが、北東ロシアに対して進歩的影響を与えたと主張した」という風に書かれているわけです。

で、後は同じような名前が出てきますが、最初ですからちょっと申しておきますけど、カラムジンというのは、これは有名な体制派の学者であります。が、「タタールのくびき」はロシアにとって大きなマイナスだった。しかし、マイナスであって、やがてロシア帝国になっていくわけですが、その中央集権国家の形成にとってモンゴルの支配というのは非常に重要な役割を演じた。それはまた、ロシアの専制を強化することに対しても大いに貢献したと主張しました。もう一度言っておきますが、カラムジンって人は専制はよい、ロシアにとって専制政治こそ有るべき姿なんだという、そういう主張の持ち主ですから、そういう立場から専制を評価、つまり、モンゴルに支配されたおかげでいい結果が生じたということを言っているわけです。で、ソロヴィヨフ、クリュチェフスキーは時代から申しますとカラムジンの後の時代の人たちでして、この人たちは、いやタタールのくびきの結果、ロシア国家の形成が促進されたというが、そんなことはない。ロシア国家はあくまで内部的、有機的發展の結果であると主張します。クリュチェフスキーって人は大体それまでの貴族、皇帝中心の政治史に対して、社会経済史を主張した学者ですからまあ、そういう主張が出てくるのはよく分かるわけです。ですからまとめるまでもなく、ブルジョワ史学の中には、タタールのくびきがロシアのその後の歴史にプラスになったとい

う人もいるんだ、ということです。

それから二人目のデジェフスキー N. Dejevsky の *Mongol Influence on Russia*、これも同じ事典の同じ巻に載っておりませんが、ロシアに対するモンゴルの影響について、「モンゴルの影響を認める学者というのは少数派である」と書いています。カラムジン、コストマーロフ、それからベルナツキーに代表されるユーラシア学派の人たちはモンゴルの影響があったと認めるが、認めない人が大半である、「too many to list」と書いてありますが、もう枚挙にいとまがないというわけです。

それから三人目の加藤一郎さんの「モンゴル人によるルーシ支配の開始」(『史潮』新一〇号、弘文堂、一九八一年)で、加藤一郎さんは文科大学の教授で、本学の講師もしてくださっている方で、これも、あの、モンゴル時代のロシアという、まあ、ロシアの古い時代を研究している日本じゃ数少ない専門家の一人で、最も活躍なさっている方だと思いますが、加藤さんはこの論文の中でどういう影響をロシアに与えたかということについて「今日でも意見の一致はない」と書かれています。で、加藤さんは、独自のお考えで、積極的影響論と否定的影響論の二つに分けられているんですけども、積極的影響論の例としてベルナツキー、K. ウィットフォーゲル、B. シュプラーなどをあげておられます。これはですね、くびきがモスクワ国家、ロシア帝国、ソ連の国家的性格を規定したという立場の学者で、ロシア国家の形成に寄与したというだけじゃなくて、できあがった国家の性格をかなり強く規定していると、そういう意味で、このモンゴルの支配というのは極めて大きな影響力を持っていたというのが積極的影響論です。それから否定的影響論。これは、あのソ連の歴史家に多く見られる考えで、くびきを破壊とか略奪とか、一過性の現象に限定して、それ以前のロシアの内在的かつ自然発生的発展の方向に深刻な影響は与えなかったとするものです。クリュチェフスキーやソロヴィヨフに近いような、そういう考え方もここに入るんだらうと思います。そして、加藤さんはそこです、この消極的、否定的影響論はロシア人のモンゴル人に対する蔑視の現われであるという風に説明されております。

それから、四人目に栗生沢猛夫さん。この方は北海道大学の教授でありまして、「モンゴル支配」(タタールのくびき)のロシア史への影響の問題」という文章を書かれています。これは、私が、田中陽児さん、和田春樹さんという友

人と三人で編集しました、三巻本の『ロシア史』の第一巻（山川出版社、一九九五年）に収録されています。この本には、補説というのがありまして、特定の問題について独立項目を立てて、そこでまあ、そのテーマについて論ずるというスペースがあるんですが、栗生沢さんはそこでその「モンゴル支配のロシア史への影響の問題」というのを書かれておられます。これを栗生沢さんは三つに分けるんですね。まず、被害は深刻でロシアの後進性の主要な原因になった、そういう考えが一つある。で、これは、B. グレコフとかB. A. ルイバコフ等に代表される。で、二番目は、被害は大きくて、そういった意味で非常にマイナスだったんだけれども、他面においてロシアの国家形成に役立ったという考え方。さっきから説明しておりますがカラムジン、コストマーロフ、ベルナツキー。こういった人たちが第二グループで、最後に影響をまったく認めないソロヴィヨフ、クリュチエフスキー、とこの三つのグループに分けておられるわけです。

で、それでですね、ついでに言っときますと、栗生沢さんは、ロシア史への影響の問題については今のように論じているわけですが、その前に実際にロシアにどのくらい被害があったのかと、いうことについてはですね、これは史料的に答えるのは大変難しいといわれています。これはまあ私も、もちろんさっきから言っていますように専門外の問題ですけども、おそらく、古い時代に、ある外国の軍隊が入ってきてですね、どのくらいの被害を与えたかということはですね、これを明確に示すのは難しいと思うんですね。それは例えば家を何軒壊したか、何軒壊したことは分かっていたにしても、何軒ある内の何軒をどういう風に壊したのかってことまでは、分かりませんから。で、栗生沢さんは、非常に大きかったということは推定されるけれども、具体的には資料がないのであまり細かいことは言えないというふうに言われております。これはまあ、私もそうだろうと思いますね。

ただ、ここで栗生沢さんが書いてらっしゃるのをごく一部分だけ紹介しますと、「考古学者の情報では、調査された七十四の都市のうち、四十九がモンゴル軍によって破壊され、そのうち十四はそれきり復興せず、十五が村となってしまった」というんですから都市の破壊ってのがかなりひどかったことが分かります。で、まあ、そのことに関連して手工業が非常に大きな打撃を受けるわけですね。モンゴルは遊牧民族ですから、農民から畑を取り上げるなんてことは一切しません。で、その代わり、都市を占領して、その手工業者を連れ去っていくなんてことをかなりやったわけでした、その

ためにロシアの手工業は、ある学者によれば、「破壊的打撃」をうけ、「ロシア文化の発達を一五〇～二〇〇年間はばんだ」とも言われているそうです（B. A. ルイバコフ）。しかし、さっきも言ったようにですね、これは実証といっても、なかなか具体的に証明できる問題ではないんですが、まあ、栗生沢さんはその影響を三つに分けると同時に、被害がかなり大きかったということも言っておられるわけです。

それ以上、たった四人ですが、まあ、私の能力と時間の関係で四人の方だけを調べたわけですが、杉山さんのですね、「モンゴル経済圏に組みこまれて、活性化した」、というようなことは出てこないんですね。まあ、もちろん今言ったようにたった四人ですから、他にそういうことを言っている方がおられるかとも思うんですけど、それから、あの大体一八世紀の末ぐらいから一九世紀の初頭にかけて、かなり多くの外国人がロシアに入ってきましたけども、そういった人たちの書き残した本を見ましても、一九世紀中頃までロシアはまったくその経済的っていうか、もっと具体的に商業的にですね、未発達であったと考えられます。で、商業経済の発展はまあ、一八世紀の終わり、一九世紀の初頭からだというのが普通言われていることですね。ですからどうもこのモンゴルの経済圏に組み込まれて活性化したって言うことも、とくに、モンゴル支配の時期をこえて、一六世紀以後まで、その「活性化」が影響していたかどうかという問題をふくめて、まあ、この問題も実証しにくい問題ではありますけれども、あまりそれを重視するのもどうなのかなという気がいたします。

それで、第三章の「国家形成への影響について」に移りますが、以上でふれたように、影響があったと見る人は、ロシアの国家形成に寄与した、プラスになった、そういう意見が多いわけですね。ですからそういう点について、どういふうな考えがあるんだろうということで、これもまあ、四人の方のご意見をレジュメに簡単に書き出してみました。これですね、非常に複雑。例えば最初にそこに出てきます、カール・マルクスにしてもですね、実はレジュメに書いてあるのはほんの一部であって、それに関して、あの、別の面からいろんなことを言っているわけですが、ごく簡単に説明していきたいと思います。

で、マルクスの、その『一八世紀の秘密外交史』(K. Marx, Secret Diplomatic History of the Eighteenth Century, London, 1899)という本ですが、これはご存知の方も多いと思いますが、大変珍しい本でして、そこに書きましたように一八九九年あのカール・マルクスが亡くなった後に彼の娘が編纂してロンドンで出版した本です。ところがその内容はですね、そこに引用したのはごく一部ですけども、全体としてみると、ロシアというのは、マルクスの生きていた時代のロシア帝国はですね、これは実にけしからん国である、そのけしからん国であるというその原因はどこから来ているかという、要するに、モンゴルの支配から来ているのだということですね、モスクワ国家、ロシア帝国というものはまさにモンゴルの継承者なんだという立場で、全体を論じているわけですね。で、こういう考え方をロシア人が大変嫌っておりまして、あの、ご承知のようにソ連崩壊の前のロシアというのは、マルクス・レーニン主義を国是としているわけ、したがって、もちろんマルクスの全集についてもですね、非常に精緻な、完全なものを出しているわけですけども、その全集から、ただ一冊ポロッと落ちてしまっているのが、この「一八世紀の秘密外交史」であるというわけです。まあ、そういう意味では非常に曰く付きの、というか、有名な本です。

一九七九年に石堂清倫さんが訳されて(『一八世紀の秘密外交史』三一書房)日本語で読むことができますが、その中で、レジュメに書いてあるように、「モンゴル奴隷の血にまみれた泥土がモスクワ国家を育てたゆりかごなのであり、近代ロシアはモスクワ国家の変態に過ぎない」と言っているわけです。で、まあ、これも時間があれば、ご紹介すればかなり面白いこともあるんですが、割愛いたしまして、もう一個所だけ、これが最後の結びの部分ですけども、マルクスはこう言っています。「モスクワ国家が形成され、大きくなったのは、モンゴルの恐るべき奴隷の卑しい学校においてであった。モスクワ国家の力は、隷属の技術の達人となって蓄積したものに他ならない。ひとたび解放されてからも、モスクワは奴隷にして主人という伝統的なその役割を演じつづけた。最後に、ピョートル大帝は、チンギス・ハンがつたえた世界征服へのはげしい野望と、モンゴル奴隷の政治的な巧妙さとを一つに結びつけたのである」。要するに、モスクワ国家、それを引き継いだピョートル大帝のロシア帝国、これは、モンゴル奴隷の政治的巧妙さを持っている油断のならない国である、ということをやっているわけですね。かつて東洋大学の田中陽児さんがこのマルクスの考えを論じて、これを

「マルクスのロシアに対する偏見のあらわれ」というふうに言う人もいるけれど、そうじゃなくて、これはこの時代の、つまりマルクスの時代の、つまり一九世紀の後半のヨーロッパの知識人に共通する対ロシア観の一例にすぎないものだと、つまり特にマルクス一人がおかしかったわけではないということ論じた論文があって（モスクワ国家論の「類型」『東洋大学紀要・文学部篇』一九六七年）、私は大変感銘を受けた覚えがあります。

それから二番目にですね、これは歴史家として取り上げるのはおかしくなとも思っただけでも、司馬遼太郎さんの『ロシアについて』（文芸春秋、一九八六年）という本がございます。で、この本の中で、そこに書いてあるように「イヴァン四世は……遊牧国家の支配・収奪の原理や形態、やり方を優等生の答案のように、ひきうつしているのである」。つまり、あのモスクワ国家というのも、これはまさにすべての点で、キプチャク汗国、つまりモンゴルの支配をそのまま模倣したものである、ということをおられるわけです。で、その他にも、まあ、いかにも司馬さんらしいと思うような指摘がいくつもあるんですけど割愛いたします。で、ただ、ちょっと言っときますと、司馬さんはモンゴル支配は非常に残酷だったと、はっきり書かれています。ですから、司馬さんがモンゴルびいきだというんですけれど、ロシアに対してモンゴルが残酷な破壊的なことをやったという事は認めた上でのモンゴルびいきです。例えば、「タタールのくびきといわれる暴力支配の時代が二五九年のながきにわたってつづくのです。このモンゴル人による長期支配は、被支配者であるロシア民族の性格にまで影響するほどのものでした」という言葉があります。マルクスの主張もそうなんです。モンゴルに二五〇年間支配されて、その間モンゴルに苛め抜かれてですね、苛め抜かれてもそこを何とか、生存していくために、モンゴルに対して何というか、正面から喧嘩するんじゃなくて、裏の方から手を回して適当にやるっていうような、そういう技術を覚えちゃって、で、人格が卑しくなった、とそういうことを言っているんですね。これは多くの学者が言っていることです。後で紹介する時間があれば申しますけど、アレクサンドル・ゲルツェルも同じこと言っています<sup>3)</sup>。今引用した文に続けて、司馬さんは「一六世紀になってはじめてロシアの大平原にロシア人による国ができるのですが（つまりモスクワ国家ですね）、その国家の作り方やありかたに、キプチャク汗国が影響したところは深刻だったはずだと私は思っています」として、「ロシアの王朝は、タタールの国家体制の後裔である、という考え方は、いまでは、個々

の両制度を精密につきあわせることによって、古いロシア史の見方になったとされていますが、しかし『骨格』でなくとも『体つき』や『おもしろ』といった、ごく一見の印象からいえば、右の古い見方について傾いてみたくなることがあります。ロマノフ王朝はモンゴルの汗がそうであったように、皇帝の専制に終始しました」と書いています。

まあ、拾い出すときりがないんですけど、それから、司馬さんがこの本を書きになったとき、ソ連は存在しているわけですから、現在のソ連にもこういった傾向があるとしたうえで、「武力のみが国家をたもつという物騒な思想を、ロシア帝国は、かつて自分たちを支配したキプチャク汗国から学び、ひきつぎました」とも述べています。そういうわけでして、司馬さんもですね、二五〇年にわたる、そのモンゴルの支配というのが、いわばロシア人の体に溶け込んでしまっ、すべてモンゴルのやりかたをそのまま踏襲した、ということが言えるんじゃないかというようなことを、文学的表現で言われているわけですね。

それでその次、加藤一郎さんですが、加藤一郎さんのさっきのとは別の論文で、「タタールの軛」（『ロシア帝国の興亡』、新人物往来社、一九九一年）という論文があります。で、この中で、加藤さんは「国家Ⅱ支配者の私有財産というモンゴル人の国家観は、併合・征服したロシアの土地を自分の『父祖からの世襲的財産』とみなすモスクワ大公、ロシア皇帝の政治思想に継承され、『タタールの軛』以降のロシアの政治体制にアジア型専制国家の色彩を与えていった」ということを言われているわけです。これは、もう、ちょっと時間が経ち過ぎておりますので、ごく簡単にしますけども、さっき紹介した「モンゴル人によるルーシ支配の開始」の中でですね、具体的にいくつかの例を挙げてこの、モンゴルの国家観、あるいは政治のやりかた、これがロシアをアジア型専制国家にしたという事を論じておられるわけです。

まあ、今レジュメに書いてあります以外のことを言いますと、例えば西ヨーロッパの中世に「恩貸地制」というのがございますが、「恩貸地」に對比されるものが、ロシアでは「ポメースチエ」。これは、加藤さんは「知行地」と訳されてます。栗生沢さんなんかは「封地」と訳されておりますが、それはともかくとして、この西ヨーロッパの「恩貸地」とそれに対応するロシアの「ポメースチエ」を比べるとぜんぜん性格が違う。で、「ポメースチエ」はどこから来ているかという、モンゴルのロシア統治をそのまま踏襲しているのだということを加藤さんは述べています。それとも一つ挙げて



おけば、あの、これも私、全く知らなくて加藤さんの論文で教えられたんですけども、モンゴル人はですね、税を徴収するために、人口調査を占領直後からやっているわけです。で、モスクワ国家はこれもそのまま踏襲するわけです。ところが、この加藤さんの論文によると、西ヨーロッパでは人口調査は「封建国家の主君が全く実行できなかった政策、封建時代以後のその後継者が、絶対主義の末期においてやっと利用することができた政策」なのであり、それをモスクワ国家はずっと早い段階で実施することができたというように、まあ、国家の基本的あり方、政策、そういったようなものを比較してですね、モスクワ国家、ロシア帝国というのは多分にアジア的専制国家の色彩を持っていた、それはたどっていくとモンゴルの支配が原因であった、ということ言われているわけです。

で、それから、最後に、杉山さんですけど、レジュメに書きましたのは『遊牧民から見た世界史』からの引用で、「ロシア帝国は、体質としてモンゴル支配の影を長くひきづりながら、表面上、それをあからさまに言われることをひどく嫌った」とあります。それに続く文章を読んでみますと、「むしろ、モンゴルはロシアに災厄だけをもたらした悪の権化だと声高に叫びつづけた」とあります。だから杉山さんはもちろんロシア帝国の体質はモンゴルの影響を受けているんだけど、ロシア人はそれを言われるの嫌がって、それでまあ、ソ連の学者はそれを棚上げにしまして、我々はモンゴルに痛めつけられたということだけを言っている。まあ、そういう主旨だろうと思います。で、これについてもまだまだいろいろ杉山さんはその本の中で言われているわけですが、時間の関係で割愛いたしたいと思います。

それで、以上こう見てきましたですね、言えることは、表現の仕方、力点の置き方は違うんですけども、少なくともそこにあげた四人の方が一致して言われていることはですね、ロシアはいわゆる純粹な西ヨーロッパ・タイプの国家ではない。まあ、それをアジア的とか専制的とか、それはともかくとして、その要素、違う要素というのは要するにモンゴルの支配から生じたという点では一致していると思うんですね。で、要するに、そのモンゴルがロシアのその後の国家のあり方、つまり進む道を決めてしまった、ということだけは確かにいえるわけですね。

で、それがロシアやロシア人にとって、よかったのか悪かったのかというのは、これは別の問題で、我々歴史家の扱う

問題ではないんではないかと思うんですね。ですから、うーん、杉山さんもそこまで言われているわけじゃないけれども、モンゴル経済圏に組み込まれて活況を呈するようになった、つまりそのプラスの、モンゴルの影響がロシアの進路を決めた、そして、そのことは結局よかったんだ、というふうには、そこまでは私は言いきれない。もちろん、じゃ悪かったんだといえるのか。従来の西ヨーロッパ的な視点から世界史を見ていく、つまりアジア的専制に対してヨーロッパの自由主義・民主主義は超歴史的なもので、無条件にいいんだというような考え、まあ、これもですね、僕は全部とは言いませんけれど、ある部分までは西ヨーロッパ人の偏見だと思うんですね。で、ですからそういう点で良いとか、悪いとかいうのはこれはちょっと別の問題だと僕は思う。それからまた、モンゴルが残虐であったか、なかったかというのもですね、これちょっと時間の関係で、もうはしりますけれども、これもですね、僕は大変問題だと思うんですね。

それに関して、杉山さんご自身が次のように言われているんですが、これは非常に示唆的だと思うんですね。それはまずモンゴルが西アジアで非常に残虐なことをしたと、イスラム側で主張される、「イスラム史書の数字表記は、一桁どころか二桁くらい多い。たぶん気分である。モンゴル側でまとめられたイスラム史書にも大変な数が記されるから、信用できるのだ、という主張もおかしい。当時の軍記物において『破壊』や『殺戮』は悪業ではなく功業である。できるだけ誇大に言うのがあたりまえだ。ヒューマニズムは、近現代の産物である」(『モンゴル帝国の興亡(上)』)。これは僕、その通りだと思うんですね。で、例えばもっと話をひろげて戦争自体が良いか、悪いかって問題だってですね、確かに現在、我々の中でそういう問いを發して戦争はいいんだって言う人は一人もいないと思うんですね。それは正しいですね。だけでも、それじゃ昔から戦争は悪であったということを一〇〇人が一〇〇人全部賛成するかって、そうは言えないと思うんですね。

で、もう時間がありません。要するにですね、戦争に対する考え方も、侵略に対する考え方も、戦争で人をたくさん殺すことがいいか、悪いかっていうことも、これは時代によって変わるわけですね。ですから、杉山さんのお考えについて私は誤解してるのかもしれませんが、一三世紀という何百年前のモンゴルの残虐行為を、今更、弁護するとか何とかという作業自体が、私には、ちょっと歴史家の仕事から離れているんじゃないかな、という風に思われるわけです。ですか

ら、ともかくさっき言ったように、モンゴルの支配がロシアに、まあ、私も引用した通りに何らかの影響を与えたとも思うし、それが良かったか、悪かったかってことは論じないで、ともかく影響を受けていたということを言っておきたいと思います。

ただ、あのロシア人はですね、特にロシアの知識人は、これを決してありがたいことだと思っていないんですね。例えば、ちょっと、もう時間切れなので、一つだけにしますが、作家のドストエフスキーが一八七七年に次のような文章を書いていました。「ヨーロッパ人は何があろうと、いかなる犠牲を払おうと、たとえいかなる事情のもとでも、我々を彼等の仲間と認めようとはしなかった。へロシア人を一皮剥けばタタール人が出てくる」(この部分はフランス語です)というわけである。そして、これは今日にいたるまで、少しも変わっていない。ヨーロッパ人の間で、われわれは諺にまでなっているのである」(『作家の日記』、一八七七年一月「我々はヨーロッパでは人間の屑にすぎない」ということでロシア人自身はですね、さっきから言っているように、私は良い、悪いって思っただけじゃないんですけれども、ロシア人自身はモンゴルの影響を受けてちょっと西ヨーロッパと変わってしまった、ということに関しては決して喜んではいなかったんだというように思えます。えー、大変厳しく時間のことを言われているもので、ここで終わります。

〔付記〕本稿は一九九七年一月二三日(土)の法政大学における最終講義「ロシア史上のモンゴル」の速記原稿をもとし、字句を整え、若干、加筆したものである。なお当日、時間の関係で省略した部分のうち、いくつかについて、註をつけた。

(1) デジェフスキーが、さきの文章の冒頭で、モンゴルがロシアに如何なる影響を与えたかということとは「帝政時代、ソ連時代をつうじて、最も論争をひきおこした問題である。多くの学者が、これについて、ふれることはふれるのだが、この問題だけを専門的にとりあげて徹底的に追究した研究は全く存在しない」と述べているのも、このことと関係があるであろう。

(2) たとえば木崎良平氏である。木崎氏は「ピーター大帝」(清水書院、一九七一年)のなかで次のように書いている。「蒙古支配時代、北東ロシアの住民は……塗炭の苦しみにおとしめられた。しかし、総じて言えば、この蒙古支配時代にこそ、在来ほとんどヨーロッパと接触のなかった北東ロシアは、むしろ蒙古人の西方への通商拡大政策に支えられて、ヨーロッパへと指

向した。蒙古人がロシアをヨーロッパから切り離したなどとは、全く根拠のないことである。……ロシアのヨーロッパへの指向性は、実に蒙古支配時代にこそ与えられた」（同書四二頁、傍点著者）。そして、このような主張の前提として、次のような木崎氏のロシア史観があると言えよう。「ヨーロッパは文明と進歩、アジアは野蛮と停滞という固定した図式の中で、何らの理由もなく、ロシアの発展はすべてヨーロッパに由来し、ロシアの後進性はアジアの賜であるというような見方は決して適切ではない。……ロシア史をヨーロッパの光明とアジア的蒙昧の交代の歴史として見る見方で、最も問題になるのはロシアの蒙古支配時代をどう取り扱うかということである」（同書三九〜四〇頁）。

（3）一九世紀の大思想家A・ゲルツェンは『ロシアにおける革命思想の発達について』（金子幸彦訳、岩波文庫）のなかで、「およそ二世紀のあいだつづいたこの不幸な時代のうち、ロシアはヨーロッパから立ち遅れてしまった。迫害され、たえまなしにおびやかされ、窮乏しはてた国民は圧迫されている者につきものの、ずるい、卑屈な性格をもつようになった。一般の精神は転落した」（同書四五頁）と書いている。この本はヨーロッパ人にロシアを紹介するため、一八五一年、フランス語で書かれた。

（4）他国を侵略したり、植民地支配を行ったのは日本だけではない。従って、日本だけが、いつまでもそれについて謝罪し続けるのはおかしい、といった主張がある。私は以前から、このような考えは、一九二八年八月に日本も調印し、翌年発効したケロッグ・ブリアン協定（不戦条約）の前と後では、侵略戦争に対する国際的糾弾の重みがすっかり変ったという事実を無視したものであると主張してきた。一般的にいつて戦争、侵略に対する人類の見方は歴史的に変わるものであると、私は思う。

そのことを前提としなければ、他国・他民族に征服されて占領、支配されることがその国やその国民にとってプラスになるはずはないという現代の国際社会の常識からいって、モンゴルのルーシ支配のプラス面を論ずることなど無意味であらう。杉山さんの「ヒューマニズムは、近現代の産物である」に、私は賛成である。